壁の向こうへ

Zero Gravity

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壁の向こうへ

【Ｎコード】

Ｎ７９４７Ｘ

【作者名】

Ｚｅｒｏ　Ｇｒａｖｉｔｙ

【あらすじ】

日本の普通の高校にこの春入学する桜花院真美（おうかいんまみ）は誰もが振り向く美少女だけど、性格が明るく好奇心旺盛。オマケに厄介事に巻き込まれ易い体質で…そんな真美が車に轢かれて神様に言われた言葉は交換で他所の世界に行け！？笑い有り、涙は…まあ、そう言ったお話です。

第1話　選ばれし君（前書き）

前回の作品に挫折した結果始まった、新しい作品です。
頭の中に構想は出来上がっているのですが、何分煩悩に左右され易い正確なので不定期更新ですがそれでも読んでやると言う心優しい方はお付き合い下さい。

第1話　選ばれし君

その日は、真新しい今時少し古いと思われるセーラー服と高校生になったのだから楽しまないと、と思って少し背伸びして丈を短めにしたスカートを着込んだ。
入学式から授業が有る訳でもなく、手にしたカバンの中には携帯と化粧ポーチと飴やガムその他少量のお菓子類を詰めたが、量が少ないのでペチャンとしたカバンを持ってお気に入りの腕時計をした。

鏡の前でクルッと回って身だしなみも確認した。
「よしっ！」
トントンと軽い音で階段を降り、リビングに入る。
リビングでは新聞を読みながらコーヒーを啜るお父さんの姿と焼きたてのトーストとサラダを運ぶお母さんの姿が目に入る。
何時も通りの風景だ。
「おはよ」
「ん？ああ、おはよう真美。制服似合ってるぞ」
「ありがと、お父さん時間大丈夫なの？」
「今日は、真美の入学式だから昼から出勤なんだ」
コーヒーを啜りながら、そう言う父は娘の自分が言うのも何だがそこそこカッコイイと思う。
ハーフフレームのメガネが似合っている。
「貴女の方こそ急がなきゃダメでしょ？昨日出るって言ってた時間

まで後に十分しかないわよ？」
「あ…急げっ！」
口の中にサラダと牛乳を流し込むとトーストを加えて家を出た。
「んっふぇふぃま～ふ（行って来まーす）！！」
「気を付けてな！」
「後で学校で会いましょう？」
「んんっ（うん）！」
朝日の昇ったほんのり肌寒い空気の中駆け出した。

口の中に入った、トーストを齧りながら学校までの道を駆ける。
学校までの距離は大した事はないし、坂道が凄い訳でもない。
このままだと余裕で着けるなと思っていた。
信号が丁度タイミング良く青になったので、横断歩道を駆け抜けようとした時――――――――――――――――――――――――
キキキキーーーーーーー！！！
真横から信号を無視して突っ込んで来た外車が見えた。
危ない！そう思った時には、勢いの付いた足は止まらず車の前に飛び出していた。
外車の運転手と目が合った、目を見開く運転手は割と若かった。
車が当たる瞬間、目をギュッと閉じた。

轢かれる！？

「……あれ？痛くない…」

そっと目を開けると、辺りは真っ白。

見渡す限り影も何もないただただ白だけの空間。

足元も何だかフワフワしていて安定しない、なのに転ばない。

暫し呆然としていた。

『世界には繋がりと言う物がある。幾つもの世界は近くの世界と積極的に交流を深め、自分の世界の繁栄を手助けしてきた』

「え…？」

『世界とは、即ち全てであり、世界その物の事を人は神と呼んだ』

「…貴方は？」

『わしは君の住む世界、地球その物であり、人はわしの事を神と呼ぶ」

「神様！？」

目の前には真っ白い髭の生えたお爺さんがこれまた真っ白い服を着て立っていた。

いや、立っている様に見える。

どうしてだか分からないがハッキリとしない陽炎の様に霞んで見える。

『左様、そして、わし等神は一定の周期で他の世界と住人を一人交換するのだ。それに桜花院真美、そなたが選ばれたのだ』

「住人を交換する…それって違う世界に行かなきゃならないって事

？嫌だよ！？」
『現にそなたはこの世界では死んだ。この交換には一度死んだ者をもう一度死ぬ前に戻し、世界を渡す事とする一種の取引でもある』
「断るとどうなるの？」
『当然あるべきままに戻る。死して記憶を失いまた、輪廻の環に戻るのだ』
「……」
もう、あの日常には戻れない。
優しかったお父さんにも、理解してくれるお母さんにももう会えなくなる。
『強制はしない、しかし、向こうの世界の利になる者を交換するから互いに意味のある取引になる。けして、苦しみだけの世界ではないだろう』
「…行きます。行かせて！」
『…よく言った。そなたは我が世界の誇りだ胸を張って向こうの世界に行くがよい！』
白の輝きが強くなった。
目の前で白がスパークして、そこで意識が途絶えた。

第1話　選ばれし君（後書き）

次回をお楽しみに！

第2話　異界の神と怪しい光（前書き）

お気に入り登録をもうして下さった方、本当に有難う御座います！
もっと喜んで頂ける様に精一杯書きますので宜しくお願いしますね！

第2話　異界の神と怪しい光

『起きてくれないかな？そろそろ事情を説明したいんだけど…』
声が聞こえて目を開けるとそこには、地球の神様の着ていた服に似た真っ白の服を着た金の髪の青年が立っていた。
地球の神と同じで、陽炎の様に薄ぼんやりとして霞んで見える。
「う…ここは…？」
目を擦りながら上半身だけ起すとこの場所が何処なのかが気になって呟いた。
『ここは、バルトエント。君の居た地球とは違う世界…かな？』
「異世界…本当に来ちゃったんだ…貴方は？」
『私はこの世界の神と呼ばれる存在。君達の世界では神様を色々信仰してたみたいだけど、大概の世界には神様は数人しか居ないんだ。君が会った神は恐らく世界で一番信仰されているんだろうね』
少し低めのバリトンで響く声は何重かにぼやけて聞こえる。
「貴方はこの世界で一番信仰されてるの？」
『そうだよ。信仰が強いほど力も強いんだ。他の神は異世界と干渉する程は力が強くないんだ』
「じゃ、貴方が私を交換したの？」
『そうだよ。幾つかの候補を君の世界の神から出して貰ったんだ。

近い内に亡くなる運命とこの世界に最も利益となる人をね』
「利益？私何にも特別な事出来ないよ？勉強も大した事ないしスポーツは…まぁ得意だけど」
『違うよ。僕の世界には君の世界には無い物があるんだ』
「私の世界に無い物？」
『そう、具体的に言うと…魔法や竜なんかが代表的かな？』
「…は？」
神様の言った事が理解出来ず、口をポカンと開けて聞き返した。
神様は何事も無かったかのように話し始める。
『君には他の人にはない可能性が秘められているんだ。それは、君の世界では役に立たない物が多かったけどこちらの世界では多くの事が可能になる』
「可能性…」
前の世界では運動神経がいい事意外特に得意な事が無かった私に多くの可能性がある？
周りの人の役に立つ事をする事も、困った時に解決出来る様な力があるのかもしれない。
『そう言う事だから。君には僕の世界で自由に暮らして欲しい』
「え？自由に暮らしていいの？」
『勿論だよ』
「何もしなくていいの？」
『有りの侭の君でいいんだよ。君の存在は僕の世界を大きく動かす』
「？」
『じゃあ、違う世界で君の思うが侭の人生を歩んで欲しい。もう会う事は無いだろうけど、君の幸せを願っているよ』
そう言った、神様の顔が歪んで先程と同じ様に白が視界を埋め尽くし意識は白い闇の中に吸い込まれていった。

「う〜ん…ここは？」
目が覚めると、そこは鬱蒼とした森の中だった。
周囲は夜の闇の中で真っ暗。
でも、空は今まで見た事の無いほど澄んだ満天の星空だった。
「あれ…何だろう？」
ふと、空から目線を下げるとフワフワと翠の蛍みたいな小さな光りが飛んで来る所だった。
「蛍…ううん、それにしては大き過ぎるし…火の玉？でも、火の玉が翠って言うのも聞かないしなぁ…何なんだろ？」
暫らく考えていると何時の間にかその光は目の前にフワフワと浮いていた。
その淡い光は、暗い森の中をぼんやりと照らし、真っ暗の中で自覚していなかった心細さを拭い取ってくれた。

気が付けば、何気なくその光に手を伸ばしていた。
その光に指先が触れると、指先を微風が通り過ぎた様に感じた。
「涼しくて、気持ち良い…」
夜の森はジメジメとしていてひんやりとしてはいたが、この光に触れた時に感じたのは、爽やかな涼しさで、心の中がすっと晴れ渡る様なそんな不思議な風だった。
ゆっくりと手を離すと、その光はもと来た道をゆっくりとまた進み出した。
「あ、待って！」
ハッとして、その光を追いかけようとカバンを肩に掛け直して小走りに走り出すと、その光は待っていたかの様にまた進み出した。

光を追いかけて走る事数分、光は決して追いつけない、でも引き離す程でもないスピードで先を進み続けている。
「この光…私をどこかに連れて行こうとしてる？」
そう思った時、光は草叢の中を通って先に行ってしまったので、それを追って草叢の中に飛び込んだ。
「っ…イテテ…」
草叢を通り抜けたと思った時、突然壁にぶつかったみたいに何かに顔から衝突し、尻餅をついた。

ぶつかった物を確認しようと顔を上げるとそこには、黒い髪の毛に黒い目のワイルドな見た目の男の人が立っていた。
どうやらこの男の人に顔から激突したようだ。
私を眺める様に見下ろす眼は鋭く、少し冷たい印象を受けたが不思議と怖いとは思わなかった。
「あの…」
声を掛けるとその人は、徐に着ていたマントを脱いで私の方に投げてきた。
太腿の上に投げ渡されたそれを手で持ち上げたり眺めたりしていると男の人は抑揚の無い声で言った。
「着ていろ」
「え、でも…」
「夜の森は冷える。寒いと感じなくとも後で体に影響が出る事が多い。それに…」
「それに？」
それに…と言って黙ってしまった男の人に聞き返したが、何も答えてくれなかった。
「ありがとう」
一応礼を言うと、マントを頭から被って体に巻き付けた。
流石に男の人が着ていただけあって少し大きかった。
引き摺らない様に気を付ければ大丈夫そうだった。
マントを着て、立ち上がるとその男の人は私を疑う様な目を向けている。
「こんな森の奥で何をしていた？」
「えっと…あの…気が付いたら森の中にいて…あ」
その時、自分はあの翠の光を追っていた事を思い出し、周りをキョロキョロと探した。
すると、それは直ぐに見つかった。
光は、男の人の周りをグルグル回って私の方に飛んで来たので手を出すとまた指先を風が通り過ぎて光は男の人の肩の上に戻ってフワ

フワと浮んでいる。
「あはは…」
何だか楽しくなって小さく笑うと男の人に聞いた。
「この翠の光は何なんですか？」
「光？」
「その肩の上をフワフワ浮いている光です」
「…お前は、これが見えるのか？」
そう言って親指で光を示すので頷いた。
「何なんですか？その光、触ると涼しくて気持ち良いんです。それに、私をここに連れて来てくれた」
「コイツは俺の…守護精霊だ」

第2話　異界の神と怪しい光（後書き）

次回をお楽しみに！

第3話　精霊　（前書き）

どーも、お気に入り登録有難う御座います！
頑張って更新して行きます！

第3話　精霊

「精霊…？」
「精霊を知らないのか？精霊は世界の自然物質の象徴の様な存在だ。大抵、精霊は一つの物に従属し、それを助ける。特に人に宿るものを守護精霊と呼ぶ」
淡々と男の人は説明してくれた。
そして、続けてこんな事も言った。
「普通、精霊は宿り主以外に見えない。また、他人に懐く事は無い」
「え、でも…」
そう言っている間にも男の人の精霊は私と男の人の間を行ったり来たりしていた。
「そう、こんな事はありえない。お前の言う事が正しいならば、これは驚くべき事だ」
男の人は腕を組んで暫く考え込むと、こちらを向いた。
「一先ず学院長の所に来て貰おう」
「え、学院長？どこの？」
「学院長は俺も通っているベリュンヘル王立学院の全てを取り仕切

っている。詳しくは分からないがお前にも何か事情があるのだろう。後は学院長に話しをすればいい」
「えっと…その学院では何を学べるの？」
「学院では、精霊学や魔法学等多岐に渡って教えている。俺は戦闘学で剣等の武器の扱いを習っている」
「あと、私、桜花院真美。貴方は？」
「セドラス＝クレドルス。セドラスでいい…お、オゥカィン？」
「あ、こっちで言うと私、真美桜花院かな？真美で良いよ。セドラス」
「分かった、マミ。取り合えず学院へ向かう。歩きながら話せる事は話そう」
「うん」
そう言って男の人…セドラスと学院に向かった。

鬱蒼とした森の中、整備されていない獣道みたいな所を2人（と一

匹？）で歩く。
時々、質問をしてそれに応えて貰いながらゆっくり歩いた。
セドラスは私の歩調に合わせてくれるため、有難かった。
「精霊って人によって違うの？」
「ああ、精霊は多くの種類が存在している。主に火・水・風・土に属す。稀に自然界の物や空気中、特別な空間にいる光・闇や時・植物等を司る精霊に気に入られて守護精霊としている者もいる。しかし、今まで精霊を2体以上指揮した者はいないと言われている」
「それって人の性格によって変わったりするのかな？」
「どうだろうな。特別な方法を用いなければ、他人の精霊を見る事は出来ない。つまり精霊術に関しての研究は進んでいるが、精霊についての研究は殆ど進んでいないと言う事だ」
「精霊っていつ守護精霊になるの？」
「基本、精霊は母親の胎内にいる時に子供を選定し、生れ落ちたその時から守護する」
「…私いないんだけど」
「…詳しくは学院長と話してくれ」
「…うん」
また無言になって森の中を歩いた。

森を抜けると正面に巨大な建物が立っていた。
「もしかして、この森って学院の敷地内だった？」
「ああ」
学院は途轍もなく巨大で、五階建て以上あるように見える。
庭園は綺麗に整備され、噴水が月にキラキラと輝い花々が活き活きしている。
セドラスに連れられ学院に入り、廊下や階段を進む。
突き当たりの部屋の扉をセドラスがノックした。
「失礼します。学院長」
「あら、セドラス、勤務時間外はおばさんで良いわよ。こんな夜遅くにどうし…その子は？ま、まさかさらっ「森の中で迷っていた。事情があるようなので連れて来た」」
「そう…可愛い子ね。私はこの学院の学院長、ミレーヌ＝クレドルスよ。貴方の名前は、お嬢さん？」
「私、真美桜花院です。マミで良いです」
「マミね。よろしく」
そう言って手を差し出すミレーヌさんに手を出して握手をした。
「で、事情って？」
「俺はこれで…」
「待ちなさい、貴方も聞いて行きなさい」
「…何故だ？」
「貴方が連れて来たのよ？最期まで責任持つのは当然でしょう？」
「…」
ミレーヌさんに言い負かされたセドラスは溜め息を吐きながらソファに座った。
ミレーヌさんはこちらを向いて先を促す様に手で合図した。
「あの…突然こんな事言い出して変な奴だと思われると思うんですが…私、別の世界から来たんです」

「！…」
「そう…大変だったわね」
目を見開いて硬直するセドラスと違って、ミレーヌさんは分かっていたかのように落ち着いてそう言い私の頭を撫でてくれた。
それが余りにも優しいから目を閉じてその手に擦り寄った。
「本当に可愛い…今日は私の所に泊まりなさい。後の事は私が何とかするから」
「有難う御座います」
ギュッと抱き締められてミレーヌさんの大きな胸に顔を埋めながらそう言うと、満足した様にミレーヌさんはソファに勧めてくれた。
「で、他にもあるんでしょ？」
「その事なんだが…マミには守護精霊がいない」
「まぁ、他の世界から来たんですもの。当然と言えば当然ね」
「それだけじゃない、マミにはどうやら他人の精霊も見えるらしい。その上、俺の精霊が初対面のマミに懐いている」
「へぇ、それは凄いじゃない。マミちゃんに手伝って貰えば長い間進まなかった精霊についての研究も進むかも知れないわね。それに、マミは精霊に気に入られ易いんじゃないかしら？さっきから私の精霊もマミちゃんに懐いているもの…ねぇ？」
「はい、セドラスの精霊は涼しくて気持ちいい風の精霊かな？ミレーヌさんの精霊は温かくて包み込んでくれる様な火の精霊？」
「ええ、どちらも合っているわ。本当に興味深いわねマミちゃん。ねぇ、貴女さえ良ければこの学院で学生として通ってみない？」
「良いんですか？」
「ええ、その辺は私に任せなさい！あ、でもその為にはこの学院は王立で国に生徒全員の情報を送らないといけないから…一度国王陛下に直接謁見して詳しく話した方が良いかもしれないわね」
話が急に発展し過ぎて頭の中が変になりそうだった。
でも、見ず知らずの他人である私にミレーヌさんはこの世界での私の立ち位置を作ろうとしてくれている。

それが堪らなく嬉しかった。
「有難う御座います、ミレーヌさん。宜しくお願いします」
「良いのよ。明日にでも陛下に謁見しましょう。今日はもう休みましょう。私の部屋は敷地内の女子寮にあるの。行きましょう？」
「…俺はもう良いか？」
「ええ、いいわ。また何か用事があったら呼ぶから宜しくね？」
「…はぁ…マミ、また」
「セドラス、ありがとう」
セドラスは照れた様に頬を？いて後ろを向くと部屋を出て行った。
その背中を見送って、ミレーヌさんの帰り支度を手伝った。
「さ、私達も行きましょうか？お風呂とか入りたいでしょ？」
そう言われてみれば、今日は色々合って森の中を走ったりしたため汗もかいていた。
「はい」
そう返事して、ミレーヌさんに促されながら部屋を出て行った。
外に出ると、月の光が優しく私を包んでくれている気がした。

第3話　精霊　（後書き）

次回も宜しくお願いします！

第４話　王！？（前書き）

１０００アクセス突破！　有難う御座います！！

第4話　王！？

「ん…」
小鳥のさえずりが耳に入って目を開けるとそこには見慣れた自室の天井…ではなく、天蓋付きのベッド。
起き上がって暫く思考の海を漂い、再びベッドに倒れ込む。
「ハァ…そうだよ…もう戻れないんだよね…」
そう呟くと枕をギュッと抱き締めた。
暫くゴロゴロしていると、クスクスと笑い声が聞こえて来たので視線を向けると、そこには大変セクシーな胸元の開いたネグリジェを着て、頬杖をついたミレーヌさんが口に手を当てて上品に笑っていた。
「マミ、貴女は本当に可愛いわ。食べちゃいたい位よ？」
「た…食べる！？」
「フフ…さぁ、そろそろ起きましょう？朝食を取ったら準備して、正午前には城に行きたいわ」
「…ハイ…」
ミレーヌさんは私の手を引いてベッドから降りてシャワールームに放り込むとどこかへ行ってしまった。
「ハァ…シャワー浴びよう」

ミレーヌさんに借りた可愛い子供用だろうか、見た事の無い動物の絵柄のパジャマを脱ぎ、下着もサッと脱ぐと側の籠に放り込んだ。
昨日ミレーヌさんに教えて貰ったのだが、シャワーは向こうと殆ど変わらない。
この世界の文化がどこまで進んでいるのかは分からないが、魔法を使っているのだろうか？
温かいシャワーを頭から浴びて溜め息を吐く。
「私、この先どうすればいいんだろう？」
ミレーヌさんはああ言ってくれたけど、頼りっ放しって言うのも自分が我侭な人間になった気がして嫌だった。
「考えても仕方ないよね…」
キュッとシャワーのコックを閉めると、心地の良い水流から抜け出した。

今、私がどこにいるかと言うと…何とお城の中です。
学院から左程離れていない所に馬車で着くと門に近付いただけで門番が大声で「開門！」と言って何の確認もする事無く城に入った。

ミレーヌさんって何者なんだろう？学院長ってそんなに権力のある立場なのかな？
すると、一際立派な扉の前に立ったミレーヌさんがノックをした。
静かな廊下にミレーヌさんのノック音が大きく響き渡る。
「入るわよ」
中から何の返事もないのにミレーヌさんは大きな扉を開いて私が入ったのを確認して扉を閉めた。
「ようこそ、マミちゃん…で、良いのよね？」
「あ、はい…真美桜花院です」
部屋の中には大きなソファが並び執務机だろうか、巨大な机の奥の椅子には綺麗な女性が座っており、その隣には一人の男性が立っていた。
「私はこのバルトエント最大の国家、パラード王国の王ミラ＝マラーヌ＝クレドルス＝パラードよ」
「この国って女王制だったんですか？」
「女王様とお呼びなさい」
「はい…女王様」
「プッ…女王様って柄じゃないでしょ？アハハ、笑っちゃうわ！」
女王様とミレーヌさんは笑い続けている。
キョトンとして見ていると、女王様の横に居た男の人が口を開いた。
「ミラ様…いい加減にして下さい。ミレーヌ様も、マミ様がお困りですよ？」
「フフ…その子本当に可愛いわ。昨日、貴女から聞いていたけどオドオドしてる姿が特に可愛いわ」
「でしょう？」
また、ミレーヌさんと女王様は笑い出してしまった。
「ミレーヌ様はミラ様のご親戚なのですよ」
「あぁ、申し遅れました。私はミラ様の側近で、この国の宰相のマルス＝K＝セノールと申します」
流麗な動作で、礼をして自己紹介をしたマルスさんは凄く格好良か

った。
「ミラ様、そろそろ話を進めて頂いても宜しいでしょうか？」
「え～でも、マミちゃんともっと…「宜しいでしょうか？」…ハイ」
「…」
怖い、マルスさんの精霊が水だからだろうか？部屋の中の温度が下がっている様な気がする。
ミラ様の精霊である地の精霊は私の後ろに隠れた。（マルスさんがミラ様と呼ぶのでそうする事にした）
どうやら、ミラ様の精霊はマルスさんの精霊はの怒りに怯えている様だ。
クスッと笑うと、三人が頭の上に？を浮かべて私を見た。
「どうかしましたか？」
「いえ、ただ、ミラ様の精霊が怯えているのでマルスさんの精霊の怒りを抑えて上げた方がいいと思います」
「…」
「…」
ミラ様とマルスさんは顔を近づけて小さな声で話していたので何を話していたのか分からなかった。
しかし、話が終わった様でミラ様がこちらを向いて言った。
「精霊が見えると言うのは本当のようね。それなら何の問題も無いわ。貴女が学院へ入る事を許可します。それと、学院での待遇は特待生枠で一年生に編入、代わりに生徒会への入会をお願いするわ」
「まぁ、簡単に説明すると、特待生として学院に入れるのよ。その代わりに生徒会に強制的に入らなきゃならないって事。それについては、貴女の見た目も関係するんだけどね…」
「見た目…？あの、特待生枠って？」
「特待生は国からの支援を受けられるエリートの事よ。学院での受講料や入寮料等の一切を国が負担してくれるの。生徒会については、直接会って聞いた方がいいと思うわ」
「そうなんですか…有り難う御座います」

そう言ってミラ様に笑いかけると、ミラ様は後ろの窓の方を向いて頬を掻いた。
「当然の事よ。準備もあるでしょうから、もう行きなさい／／／」
「はい、本当に有り難う御座いました」
そう言って後ろを振り向くと部屋から出た。
少し遅れて後からミレーヌさんが出てきて、一緒に城の外へ出た。

城を出て、ミレーヌさんの学院長室に戻ってきて、今、ソファに向かい合わせで座っていた。
「始めに貴女の適性を調べる為に、どんな才能が有るか調べる必要があるわ」
「どうやって調べるんですか？」
「…これよ」
そう言って、ミレーヌさんは一枚の羊皮紙を取り出して机の上に置いた。
「これは、入学前の生徒全員に配られる用紙なの。ここに親指を押し当てればその人の才能を調べてこの枠に浮き上がる様になってるの」

指を指して幾つかの枠を記していく。
「便利ですね」
「まぁ、とりあえず試してくれる？」
「はい」
教えられた枠に親指を押し当てた。
「はい、いいわよ」
ミレーヌさんに言われて手を離すと、大きな枠の方に文字が浮かび上がった。
「えっと…何これ！？魔法学・魔導学・精霊学・魔科学・占い学・実戦型戦闘学…ｅｔｃ、って特殊技能が無いと取れない科目が全部Ｓランク推薦って…こんなこと初めてよ」
「それって凄い事なんですか？」
「凄いなんて物じゃないわ。貴女は皆がやりたくても出来ない事が全て出来るのよ？」
「は、はぁ…」
気の抜けた返事をしていると、ミレーヌさんは顎に手を当てて考えながら呟くように言った。
「でも、一人につき４～５科目って決まってるのよね…それは決めるしかないわね…マミちゃん、どれがいいか選んでもらえる？」
「はい、あの、魔法学と魔導学、魔科学と魔工学って何が違うんですか？」
「魔法学は魔法を使う訓練をするの。魔導学は、生活に役立つ魔法を開発したり危険な魔法の改善を研究する。魔科学は魔法を原料にして何かを作り出すもので、魔工学は魔法を一般の人にも使える様に道具を作るの。この道具の事は魔具って呼ばれるわ。因みに実戦型戦闘学は、武器や魔法を利用した戦闘を訓練するの。本当はＳランク推薦を受けた学科だけ受けるって事も出来るんだけど、今までそれを２つ以上受けた人がいないの」
「そうなんですか…私、魔法学と魔導学、精霊学と…魔工学、あと、実戦型戦闘学がいいです」

「それで良いのね？」
「はい、始めの三つは色々と必要だろうし、魔工学は自分で物を作れるって何か良さそうだし、魔科学はとらなくても魔法学と魔導学を修学してれば出来そうな気がします。実戦型戦闘学は卒業後に外に出た時の為になると思うんです」
「そう、決まったならいいわ。そういう風に専攻しておくから」
「よろしくお願いします」

（じゃあ、私は用意があるから付いていけないけど。ここの隣に学院の女子寮があるから、そこの寮母さんに名前を言って寮の部屋に案内して貰って？部屋には必要な物と、後服なんかも用意しておいたから…明日は制服を着て、八時に寮の前に迎えに行くわ）
「って、言われたけど…この学院の寮って大きいなぁ」
目の前には大きな白い寮が立っている。
それはさながら高級ホテルのようだった。
「すいませーん」
「はい、あら、どちら様？」
「あの、私、今日からお世話になる真美桜花院です」
「あぁ、話は聞いてるわ。本当に可愛い子ねぇ」

寮母さんは優しそうなおばさんだった。
そんなに歳ではないのか、見た目よりもやる気が滲み出して来るのを感じた。
「さぁ、いらっしゃい。部屋に案内するわ」

部屋に着いた私達は、寮母さんが鍵を開けてくれて中に入れてくれた。
中は結構大き目で、バスルームやベッドルーム、リビングやキッチン等色々設備が充実していた。
「食事は、朝は七時で昼は十二時、夕食は七時半に一階の食堂で摂れるわ。中には自分で作りたいという人もいるからその人達には有料の注文で食材を送っているわ。基本、休みの日以外は昼食は学院内の大食堂で摂るからそのつもりでいてね？」
「はい、有り難う御座います」
「いいえ、では、また明日。お休みなさい」
「お休みなさい」
挨拶をして寮母さんは廊下を歩いて行ってしまった。
「さてと、そうだ。服が用意してあるんだっけ？」
思い出した様に、部屋の端の大きなクローゼットの扉を開いた。
「…」
クローゼットの中には、黒い元の世界の制服に似た制服と…可愛いスカート等の服ばかりだった。

オマケ
部屋をマミが出た後、ミレーヌはミラに声を掛けた。
「マミの笑顔にやられちゃった？」
「／／／そ、そんな事ないわよ！」
「あらあら…私は昨日の夜から今朝にかけて可愛い寝顔をたっぷりと鑑賞したからバッチリだけど♪」
「…マミちゃん今晩貸しなさいよ」
「残念でした。今晩からマミは寮に入るのよ」
「…っ」
ミレーヌが背を向けて部屋を退室して言った後には、悔しそうな顔のミラが残されていた。
「ミレーヌ様にも困ったものですね…ミラ様」
「何よ？」
「マミ様は学院にずっといらっしゃる訳では有りません。長期休暇等を利用してお呼びすれば宜しいかと…」
「そうね…その手があったわ！」
「はい」
今は、五月の上旬。
後3ヶ月ほどで、夏休みに入る。
「夏休みが楽しみね！」
こう言って、優秀な側近はこれを餌に仕事を進める算段が出来ていたのだった。

第４話　王！？（後書き）

元の世界と時間、一年の長さ等はほぼ同じ設定となっております。
次回をお楽しみに！

第五話　再会ｉｎ生徒会（前書き）

お気に入り登録が多くて吃驚しています。
そして、評価点を入れてくれる人まで…感激して泣きそうです…

第五話　再会ｉｎ生徒会

朝、目が覚めると寮のベッドだった。
そう、今日から私の学院生活が本格的に始まるのだ。
取り合えず部屋着のままで下の階に降りて、食堂に入った。
「大きい…」
食堂は結構広くて隅々まで手入れが行き届いて清潔な印象がする。
食堂の中には沢山の長机と椅子が並び、奥にはカウンター。
カウンターの上には絵と一緒に値段の書かれた札が並び、限定商品等が書いてある。
（何故か、この世界の言葉は分かるし、書いたら意識しないとこの世界の言葉になってしまう）
朝食は何を食べようか…
端の方に目を引く朝食セットがあった。
「でも、こっちのお金は持ってないんだけど…どうしたらいいんだろう？」
そう、私はこっちのお金を全く持っていない。
これでは、朝食どころではない。

カウンターの前で腕を組んで考え事をしていると、声を掛けられた。
「マミちゃん、おはよう。どうかしたの？」
「あ、おはようございます。あの、私お金を持ってなくて…どうしようかなぁと」
声を掛けて来たのは昨日部屋に案内してくれた寮母さんだった。
「あぁ、貴女は特待生なんですってね？特待生は学院内で何でもただで出来るカードが配られるんだけど…まだ貰ってないのね。じゃあ後で受け付けるから先に食べて。カードを貰ってから支払いするから」
「分かりました、ありがとうございます」
「い～え」
寮母さんが去って行ってから朝食セットを注文して、受け取るとトレーを持ったまま人の少ない端の方の席に着いた。
「いただきます」
手を合わせて、バターナイフでパンにバターを塗って食べたり。スクランブルエッグやソーセージみたいな物や、シーザーサラダを食べたりした。
こちらの食べ物は、殆ど向こうの食べ物と遜色無い。
こちらにしかない果物など稀に特殊な食べ物を見る位のようだと言う事は昨日一日で分かっている。
黙々と食べていると周りの人たちの談笑している声を少し遠くにバックミュージックの様に聞いた。
「ねぇ、あの娘だれ？」
「さぁ？見たこと無い顔ね」
「あの髪の毛、真っ黒よ。綺麗だけどあんな髪の毛の娘っているのね」
「顔も結構可愛いわよ。ほら、口の中に食べ物を入れて両頬を膨らましている所なんてリスみたい」
「何年生かしら？編入生？」
周りの声は聞き流していたため、まさか自分が話の的になっている

なんて思いもしなかった。

「マミちゃん、おはよう！」
「おはようございます！」
制服に着替えて、寮の前で待っているとミレーヌさんがやって来た。
この時間は殆どの生徒が授業を取っているのか、恐らく何かしらの学科を先行しているSランク推薦を取っている生徒以外は既に授業に入っている。
「あ、これ渡すの忘れてたわ」
はいこれと言いながらミレーヌさんが渡してきたのは薄い黒いカードの様な物だった。
「これはね、この学院で限られた生徒だけが持てるカードなのよ。因みにこのブラックカードは特待生でSランク推薦を取っているエリートだけしか持てないカードなの、現在この学院で持っている人は数人しかいないわ。他にも、特待生やSランク推薦者のみに渡されるゴールドカードや成績優秀者や学級役員に配られるシルバーカ

ード、貴族などが国に寄付金を払って手に入るブロンズカードなんて物もあるわ」
「沢山あるんですね」
「そうね、このカードは寮の部屋のカードキーとしても使えるし、学院内での買い物の支払いも出来るわ。因みにブラックカードは国が支払いをしてくれるから無茶な使い方をしなければ何を買っても大丈夫よ。他にも、このカードの所持者は生徒会に入る事が義務付けられているから生徒会室やその他の生徒会の管理している部屋のカードキーにもなっているわ。ここだけの話、実はこのカードで各教室の鍵も開ける事が出来るのよ？」
「そんな事してもいいんですか？」
「いいんじゃない？悪用しなければね？」
「…」
私は手の上に載っているブラックカードをジッと見つめた。
「あと、そのカード紛失した時は言ってね？カードの使用不可の手続きと再発行の手続きをしなきゃならないから」
「はい、分かりました」
「よし、じゃ行きましょうか？」
学院に向かって二人で歩き始めた。

と言う事で、今は学院内の廊下を歩いています。
授業中なので廊下を歩く人は疎らですが、次の授業から入る人もいるのか時々、ミレーヌさんに挨拶をしていく人がいる。
「ここよ」
そう言って、ミレーヌさんが立ち止まったので視線を上げて確認すると。
ミレーヌさんに学院長室並みの大きな扉の上に生徒会室と書かれていた。
「先に生徒会メンバーに挨拶しておこうかと思って、呼んであるの」
「え、皆さん先にいらっしゃってるんですか？」
「ええ」
ミレーヌさんが扉を開くとそこは学院長室並みのソファや執務机が並んでいた。
執務机には生徒会長と書かれた札も立っている。
「待たせたわね、この娘が昨日説明した新しい生徒会メンバーよ」
「真美桜花院です。よろしくお願いします！」
名前を言って九十度のお辞儀をするとシーンとしてしまった。
恐る恐る前を見ると、皆何故か笑っていた。
「うわー、学院長の言ってた通りだ、可愛い！私、カノン。カノン＝クロノックス、二年生よ。よろしく～♪」
「ホント、可愛いね？僕は、クレス＝アルトネード。四年生だよ、よろしくね？」
「俺は、ガイル＝バスタード。五年だ」
「そして、私はリフィア＝スカール。三年生で生徒会の副会長をしているわ。よろしくね？」
「俺は…挨拶しなくても分かるな、マミ」

カノンちゃんはピンクの目と髪で凄く可愛らしい感じ、髪も少しカールしている。精霊は…花の精霊かな？
クレスさんは金の髪と青い目、ちょっとチャラい？精霊は氷？
ガイル先輩は濃い蒼の目と髪、ちょっと眼力が強くて気圧されそう…精霊は火かな。
リフィアさんは、薄い眼鏡を掛けていて知的美人。髪も目も薄い緑。精霊は植物？木とかそんな感じ。
そして、最後の声の方向を見ると、生徒会長と書かれた執務机に座るセドラスがいた。
「セドラス！？」
「二日ぶりだな、マミ」
「あれ、二人とも知り合いだったの？」
「ああ」
「セドラスは何年生なの？」
「俺はガイルと同じ五年生だ」
「へー」
気のない返事を返していると、ミレーヌさんが話しに入って来た。
「見ての通りすっごく可愛いけど襲ったりしちゃダメよ？」
「はーい」
「う～ん、どうだろ？」
「…」
「うふふ…」
「…」
カノンちゃん以外が凄く反応が怪しい。
ガイルさんはただ無口なだけだと思うが、他の面子の反応の意味はなんなんだろう？
「まぁ、仲良くね？」
ミレーヌさんの一言で、顔合わせは終了した。

第五話　再会ｉｎ生徒会（後書き）

有り難う御座いました！
次回をお楽しみに！

第6話　特Sクラス（前書き）

三千アクセス突破！！
ありがとうございます！

第6話　特Ｓクラス

現在、学院内の廊下を歩いている。
豪華な生徒会質を抜け出して、ミレーヌさんとどこかに向かって歩いていた。
「そろそろ、午前の授業が終わってホームルームが始まるの。そこで貴女のクラスに貴女を紹介するわ」
「はい」
「あ、そうそう。貴女のクラスは一年特Ｓクラスよ、このクラスにはＳランク特待生と貴族の優秀者、王族等がいるわ」
「…（面倒そうだなぁ）」
「まぁ、ポッと出たどこの誰かも分からない娘が複数のＳランク特待生枠なんて気に食わないと思うけど、貴女なら大丈夫だと思うわ」
「はぁ…」

「まぁ、行けば分かるわ。あと、精霊が見える事はくれぐれも他言しないようにね？」

「え～、今日はこの一年特Ｓクラスに編入生が来ま～す！」
特Ｓクラスの担任だと思われる人がこう言った声に合わせて、教室内が盛り上がっているのが聞こえる。
私は、教室の外の廊下で待機している。
タイミングが着たら中から呼んでくれる手筈になっているのである。
「男？女？」
「女の子が良いな～可愛い子～」
「どっちでも、強ければ良い」
「こんな時期に編入なんて優秀なのかな？」
「…」
「まぁ、見れば分かる。お～い、入っていいぞ～」
声が聞こえたので教室の扉を開いて中に入った。
教室の中には教壇を囲んで大学の机みたいに半円・段状になって机

と椅子が並んでいた。
そこには疎らに生徒が座っていた。
「はい、じゃあ簡単に自己紹介して貰おうかな？」
「あ、私は真美桜花院、十六歳（？）です。受講教科は魔法学と魔導学、精霊学と…魔工学、あと、実戦型戦闘学です。宜しくお願いします！」
生徒会でしたみたいに、ペコッとお辞儀して挨拶した。
「…」
またもシーンと静まり返ってしまった。
顔を上げて様子を窺うと、キョトンとした生徒達の姿。
「可愛い！」
「って言うか、教科おかしくない？」
「それだけ優秀と言う事でしょうかね？」
クラスメイト達は興味津々と言った様子で私を見てくる。
そこで落ち着いてクラスを眺めると教室の中の生徒の少なさは異常なほどだった。
ざっと見て男子生徒三人、女子生徒二人って所。
「はいはい、お前ら仲良くしろよ～」
そう言った先生はそのまま外に出て行ってしまった。
唖然として先生の出て行った教室の入り口を見ていると肩に突然重みが掛かった。
「私は、ミル・マッカールム、ミルでいいわ。マミ、よろしくね！」
「僕はロイ・マッカールムだよ、よろしくね？」
「姉弟？」
「そう、ロイは私の二つ下の弟で十四歳。私は十六歳よ」
「同い年だね」
二人は身長の違い以外はそっくりと言ってもよかった。
しかし、性格が違うの精霊は水と火であった。
他の生徒達も追々挨拶して言った。
チャイムが鳴ったためその場で解散したので、ミルとロイと共に食

堂に向かったのだった。

食堂に到着すると、寮の食堂が小さく感じるほど大きかった。
食堂は食券を買って、注文するらしく寮の直接注文するよりも効率よく回す事が出来るようだ。
品揃えもこちらの方が圧倒的に多く、沢山の人がいた。
皆で注文すると席に着いて待つ。
「で、マミは何でこんな時期に編入して来たの？」
「え、っと…それは…」
「姉さん、人にはそれぞれ事情があるんだから余り無理に聞いちゃ悪いよ」
「ごめんね？」
「いいのよ、無理に聞いてごめんね？」
「あ、料理が来たよ」
そう言うミルの視線の先を見た。
ウエイトレスの様な服装の人が、銀のプレートに載せた料理を運んできた。

私はパスタをサッパリとしたクリームで味付けした物、ミルは美味しそうなケチャップで星の書かれたオムライス、そして、さらにロイはハンバーグとエビフライにライスの付いたセットを頼んだみたい。
さすが男の子、よく食べるなぁ。
そう思って、エビフライを食べるロイを見ていると、何を勘違いしたのかフォークに刺したエビフライをこっちに向けて差し出してきた。
「食べる？」
「えっ…えっと…」
「見てたでしょ？食べたいのかと思って」
「それは…」
「そんなに悩まなくても食べちゃえばいいのよ。ロイがこんな事言い出すなんて珍しいのよ？」
「うん…ありがとう」
お礼を言って差し出されたエビフライを口に入れて尻尾の殻の付いた部分を噛み切ってモグモグと口の中で咀嚼していると、二人が急に大人しくなった。
「ん？…モグモグ…どうしたの、二人とも？」
「え…っと…」
「うん、何でもないよ」
「…マミ、私のオムライスも食べない？はい、アーン」
そう言ってスプーンで一口分掬うとミルが差し出してきたので有り難く頂く。
「う…モグモグ、うん、美味しいね」
「…あーもう我慢できない！」
突然、ミルがガバッと机越しに抱き付いて来た。
「み、ミル！？」
「だってこんなに可愛いのよ！？もう、ホントほっぺを膨らましてモグモグしている所なんか小動物みたいで可愛い！」

「いや…まぁ、そうかもしれないけど…」
こうして、生徒の沢山いる食堂の中心で女の子に抱き付かれると言う恥ずかしい目に、初日からなったのでした。

第6話　特Sクラス（後書き）

次回をお楽しみに！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7947x/

壁の向こうへ

2011年11月20日18時57分発行